

関西学院大学におけるリメディアル英語教育の試行錯誤 (つまずきと伸びの検証)

ハーバート久代^A、南佐依^B

1. 背景

本発表は関西学院大学における英語リメディアル教育実践を報告するものである。多様な入試形態採用によって大学入学者の英語力不足が指摘されて久しいが、関西学院大学も例外ではない。その対応として2017年度よりリメディアルクラス「入門英語」を開講している。神学部、社会学部、法学部、経済学部、商学部、理工学部への入学予定者で入学前 GTEC において下位 250 名となった対象者は、各学部による必修語学クラスの代わりに「入門英語」を履修する。英語母語話者教員が担当する「入門英語 1A (1 年次)、2A (2 年次)」ではプレゼンテーション実践を通してスピーキングを、日本語母語話者教員が担当する「入門英語 1B (1 年次)、2B (2 年次)」ではリーディング、文法と語彙の基礎力強化、学習習慣の形成を目標とし各週 1 回 (90 分) 授業を行っている。設置から 2 年が経過し、2017 年度入学の 1 期生がカリキュラムを終えた今、入門英語履修学生はどういったところにつまづいているのか、またリメディアルカリキュラムの何がより「効いている」と考えられるのかを検証した。

2. 「入門英語 B」試行錯誤

入門英語対象者 250 名の 90% 以上は一般入試以外の入試形態で入学しており、体育会系の学生も多い。基本 25 人以下のクラス構成で、各学年 10 クラス開講されている。大学生のやり直しを意識した教科書とクラス内多読、Quizlet アプリも活用して、基本文法の復習、語彙の強化を中心に取り組んでいる。各学期 4 回の語彙テスト、教科書に準拠したオンライン教材を使った学習、中間・期末テストも行い、自学習の習慣付けを促している。出欠ルールは厳しく設定し、14 回のうち 4 回欠席で最終成績を 0 点としている。

初年度はつまずきも多く、入門英語開講後、学期ごとに改善を試みている。出欠ルールは当初 3 回欠席で「不可」であったが、体育会系の部に属する学生への

配慮から 2 年目にはルールを緩和した。

また、指導面では、剽窃、そして再履修を繰り返す学生やクラス内のレベルの幅などが問題に挙がった。当初は授業外での課題も多く設けていたが、コピー等剽窃が多く、初年度の再履修者の数は予想以上であった。そこで宿題には単にクリックだけでは済まないようなオンライン教材を使用した上で課題テストを課している。加えて授業外多読は廃止し、すべて授業内へと変更した。入門英語クラス履修者の通常英語クラスへ移行は可能ではあるがその条件は厳しく、実力はあるが要件を満たせず、入門クラスにとどまることになるという事例もあった。

入門英語は各学年で開講している 10 クラスすべてで同じ教科書を使用しているため、テスト等すべてにおいて数バージョン作成している。教員の負担が大きいが、動機付けに乏しい学生はすぐ情報を共有しようとするため、公平感を担保するためにもこの努力は欠かせない。また学習者と教授者の信頼関係確立のためにも、提出物への丁寧なフィードバックも重要になってくる。これも教員の負担が大きいため、今後いかに負担を減らし、なお教育効果を上げることができるかが課題である。

3. テストとアンケート結果から見えること

3.1 Pre-test, Post-test

各学期第 1 回目と第 14 回目の授業中 Pre-Post-Test (各 30 分) を行っている。英検の問題から 25 問 (25 点満点) の語彙、文法 (並べ替え)、英文読解の多肢選択形式テストを作成したもので、図 1 はその平均点の推移である。1 期生 1 年次春学期のデータが欠損しているのは、この学期に使用したテストの難易度に問題があり、秋学期使用テストから英検の級など内容を変更したためで、1 期生 1 年次秋学期以降は 2 期生も含め、同じパターンで作成した問題をクラス間及び学期間でカウンターバランスをとりながら実施している。

A: 関西学院大学言語教育研究センター

B: 関西学院大学言語教育研究センター

1 期生秋学期 Pre-test (2017 年度秋) と 2 年生秋学期 Post-test (2018 年度秋) の平均点の t 検定結果からは平均点がこの 1 年半の間で有意に伸びていることがわかる。 $(t(151)=12.2, p<.001)$ また、2 期生 1 年次 (2018 年度) 春学期 Pre-test と 1 年次秋学期 Post-test の約 1 年間でも平均点が有意に伸びていることがわかる。 $(t(205)=10.5, p<.001)$ 。

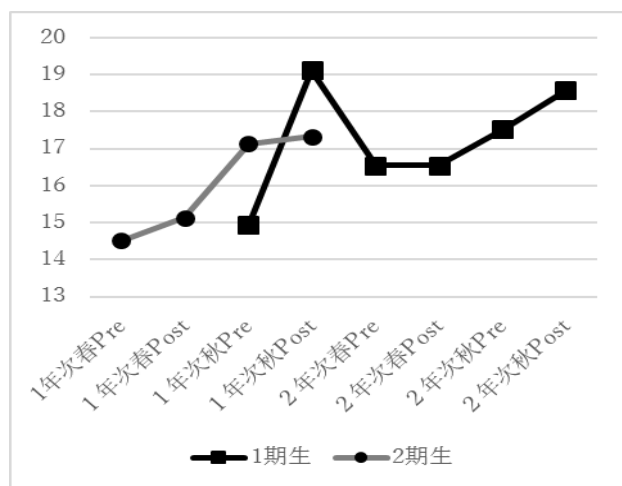


図 1 各学期 Pre-Post テスト平均点の推移

3.2 授業後アンケート

すべての学期終了時に Google フォームを用いて授業後アンケートを行った。授業内容の難易度についての選択式回答では 1 期生、2 期生ともにすべての学期で「ちょうどいい」の回答が一番多かった。「授業で身についたことは何か」への回答は 1 期生、2 期生ともに「文法」が一番多く、「語彙」「リーディング」と続く。入門英語 B の目標がリーディングと文法の基礎強化であることを考えると学生のこの回答は妥当と言える。自身の学習態度に関する選択肢回答では「予習をした」と回答する学生が「復習をした」より各学年各学期ともに多かった。「授業で役に立ったこと」としては教員作成の補助教材 (プリント)、語彙 Quiz (そのための勉強) を挙げる学生が多かった。語彙 Quiz で使用した Quizlet は学生からの支持も高く、スマートフォンを使用した学習スタイルが教室外で英語に触れる時間確保につながっていることが分かった。履修の感想記述コメントについてはカテゴリー分けを行った。(表 1 参照) 「つまずき」に関連するコメントでは「難易度」に関する言及が一番多く、レベルのミスマッチを感じた学生が少なからずいたことが分かる。「伸び」

に関連したものでは 1 期生、2 期生ともに全学期で上位を占めたのは「学び」「理解」「楽しい」のカテゴリーであった。

表 1 履修後の感想 記述コメントの分類 (抜粋)

	カテゴリー	略述
つまずき関連 (negatively perceived)	運営	クラス運営に関する言及
	難易度	難易度 (進度を含む) に関する言及
	テスト	定期テスト、語彙小テストに関する言及
	課題	課題 (宿題) に関する言及
伸び関連 (positively perceived)	運営	クラス運営に関する言及
	難易度	難易度 (進度を含む) に関する言及
	向上心、意識	英語に対する意識の変化に関する言及
	学び	具体的なスキルを含む言及
	楽しい	楽しい等ポジティブな感情を含む言及
	理解	理解に関する言及

4. まとめ

アンケート結果から分かったこととして以下の点が挙げられる。

1. 多くの学生はクラスのレベルは適切であると考え、予習に時間をかけている。
2. 基礎の復習 (特に文法) ができたと感じている。
3. 語彙学習アプリを活用し Quiz に備えているが、覚えたが忘れたという学生も一定数いる。

また授業実践の中から分かったことは

1. 剽窃を未然に防ぐための対策が重要、
 2. 負担にはなるが学生個人々人へのきめ細かなフィードバックが信頼関係構築のカギとなり得る
- ということである。

単位取得のために多くを課された入門英語学生は、その過程でこれまで曖昧だった英語の知識が整理され基礎が身についたと感じたようである。時間をかけて「やったらできる」という実感を学生の内的な動機へとつなげ、「もっと学びたい」という自発的な学習へさらにつなげる指導をしていくことが重要である。

参考文献

- 1) 大学英語教育学会授業学研究委員会 (編). (2007). 『高等教育における英語授業の研究』 松柏社.
- 2) Herbert, H. (2018). A Depiction of Remedial Students' Characteristics. *Annual Research Report of the Language Center*, (21), 33-45.
- 3) Brown, H. D. (2002). *Strategies for success: A practical guide to learning English*. White Plains, N.Y: Longman.